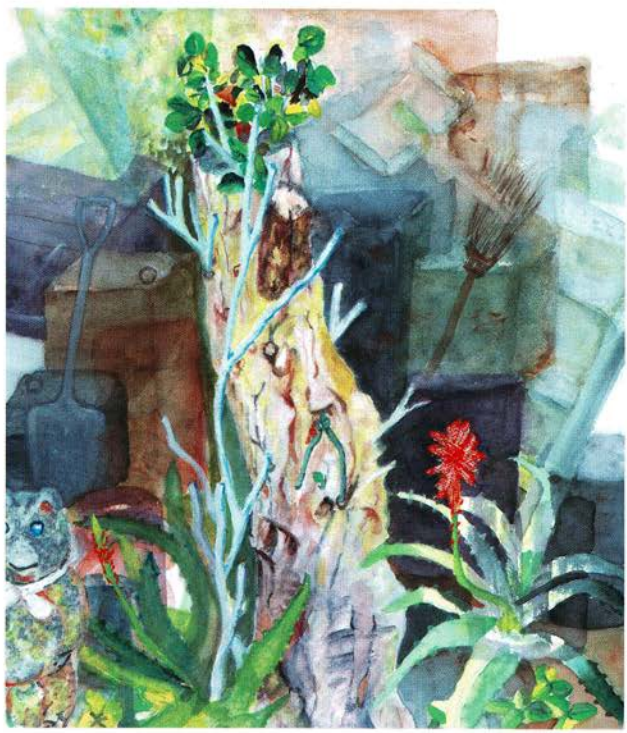
村野次郎創刊

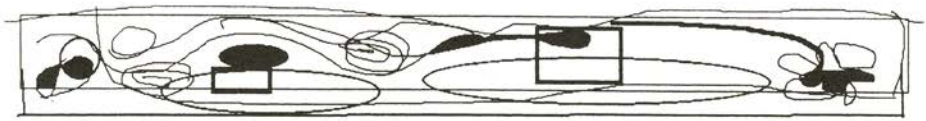
香蘭



2021年(令和3年)11月号

第 98 巻　　第 11 号　　通巻 1091 号

二〇二一年(令和三年)十一月一日発行(毎月一回一日発行)　香蘭　第九十八巻第十一号



香　　蘭

2021年（令和３年）11月号
第98巻　第11号　通巻1091号

目　　次

村野次郎作品　私の愛誦歌（75）……西　文枝…表二
作　品
一……2
二……21
三……30
推薦香蘭集……36
香　蘭　集……37
作品一特選（九月号）……相川・朝香・石井・伊藤（美）・鈴木（桂）・鈴木（順）・長野・西野・満木……14
作品二、三特選（九月号）……江口・大島（昌）・中島・藤本・松沢・丑山・川久保・栗原・中村（陽）・馬場・渡邉（典）……16
村野次郎への旅（139）……千々和　久幸……18
一頁公論（6）「香蘭」入会まで―偶然のもたらすもの……工藤　渓子……20
七　首　抄（九月号）……長野・金子（幸）・脇谷・藤本……42
エッセイ・自由研究　人生の節目で詠みたい短歌……満木　好美……44
私の読む現代短歌（10）「肥後の魔女」安永蕗子……田中　あさひ……46
焦　点（九月号）日常から浮上する歌、飛躍する歌……桜井　京子……48
作　品　評（九月号）　作品一……牧野　道子……50
作品二……市川　義和……52
作品三……能城　春美……54
香蘭集……加瀬　喜美江……56
文法あれこれ（30）最終回……田中　あさひ……58
緑　地　帯……森田（徹）・長野・栗原・内海・高橋（好）・沙阿羅……60
歌集管見「天象」短歌会合同歌集『群翔・16』……長野　道子……65
他誌に掲載された香蘭会員の作品と動向……66
歌会及び会合・会員消息・他……71
編集後記・新宿日記……74・表三
表紙絵……中村　陽子「おしゃべりな木」　目次・緑地帯カット……和田　和雄

村野次郎作品　私の愛誦歌（75）

蛇蛙われより清き備へして
冬来る土に眠りつらんか

『明宝』

西　文枝

昭和五十二年刊行の歌集『明宝』（香蘭叢書第百編）に収められている作品の一首。

村野先生の目にした世界が圧縮され、水彩画のような柔らかな言葉は、読者が自由にその景色を旅することを許している。さりげない言葉が深く心の奥に問いかけてくるようだ。

今を生きることだけに集中する蛇蛙のように、私は今を清らかに生きているだろうかと考えこんでしまう。

村野先生は明治、大正、昭和の三つの激動の時代を生きて、人生の終盤にどんな答を見出されたのか、聞いてみたくなる。

迎合し黙過して日々を生きている私に、この短歌は、生きるための視点と己の核に向き合う機会を与えてくれた。また、短歌の表現の難しさに苦心する私に、どう生きてどう歌うのかを深く問い掛けている気がする。

村野先生からの永遠の課題の一首である。

（『明宝』372頁、『村野次郎三百首』66頁に収録）

四選者の作品

酒あらば　　平塚　千々和　久幸

隣室に人をおちょくる声のして冷笑倶楽部は健在である
カラスミを食い偲びおり博多生まれの飲み友達の長っ尻など
アルコール度０・５％入口も出口もあらぬ夕べ　居酒屋
一神教のわれは日本酒多神教のきみはバーボン　さあ杯を
「我以外皆吾師」　吹けば飛ぶ思想を笑い風と遊べる
悲観的になるとき声高になる癖はやさしすぎるせいだと思う
書き泥むたび一階のリビングに降り来てエスプレッソコーヒーを飲む
満月を見るは叶わぬ妻なれば病舎の上の月はわが見つ

温もり　　鎌倉　香山　静子

ふるさとは海を距てし北の果て父母の居らねど大切な地よ
若き日に棄て来し故里恋しいと思ふは年をとつた証か
背伸びして採りし茱萸の実ふるさとの庭に紅く色付きゐるや
アルバムに様々な私が笑つてる十五・十六・十七歳の
わが脚の小さな傷は幼き日縄跳びをして怪我をした跡
吹雪く日も雪を踏みしめ通ひたる日本舞踊を習ひゐし日々
初舞台の「忘れな草」を踊りたるあの感動を決して忘れず
兄の手にすがりて雪道歩みたるその温もりの今も残りて

花束　　我孫子　丸山　三枝子

新聞にわが歌見付けくれたると岩田さんよりメール届きぬ
とどきたる日本農業新聞の一面下のわが歌に会う
粒揃いと友の言えるは短歌にあらず添えて送りし辣韮のこと
ひと色に日々は流れて夏の夜の夢のはたてに海はかがやく
コロナゆえ人と隔たりいる日々の心澄めるというにもあらず
ペンシルの芯補充して反芻す沼のようなるこころと思う
眠られぬままオルゴールの捻子まけばすかすかのわが脳に沁みる
駅頭の〈あおやま〉に買う花束に向日葵二本加えてもらう

虹に出会つた日　　東京　桜井　京子

球場のあさの水撒き虹生れて夏がゆつくりまはりはじめた
流されてゐるのではないアメンボウすういとゆきて戻つて来るよ
あれ以来二度とは戻つて来ないひと鉄砲百合が今年も咲いて
夜の部屋に入りくる小さな羽虫たち灯りが欲しい理由があつて
「あんたらと仲良くする気はないのだが」ベランダを行き来する蟻がゐる
強風が残しゆきたる枝先にイチモンジセセリ翅をふるはす
これ以上いのちを削るはもう止めむ籠もり続けて歌よむわたし
高層の部屋の様子を見に来たるスズメバチなり夏の終はりに

作品一特選

（九月号作品から）

渡辺　礼比子　選

若葉の季節　　川越　相川　公子

花咲かす雨と散らせる雨ありて季節も人も移りゆくなり
早苗田は二十日あまりで青みをりけふ二回目のワクチンを打つ
鳩まねて首を振りつつあるく児のゐて公園は若葉の季節
野の花が供へられをり姫七人が眠ると伝ふる古墳のほこら
畑中に島のごとくにある古墳麦秋の野に郭公の鳴く
古墳丘おほふ葉桜ゆらしつつ梅雨の晴れ間の風吹き抜ける

・移ろいゆく季節の微妙な変化を捉えた。上下句のバランスがよい。

梔子の花　　東京　朝香　ふさ枝

慎みて亡き人思う六月の雨にけぶれる庭の紫陽花
面白き人でありしと懐かしむ娘は亡き父の年齢（よわい）となりて
左利きの文字の慕わし亡き夫の化学記号を記せるメモ帳
思い出して懐かしむほか術のなし遺影の君はつくづく若く
訃報のみ聞きし六月過ぎゆきて夕べ真白き梔子の花
接種後の頭痛発熱倦怠感まだまだ若いと揶揄されいたり

・早世の夫の面影を偲びつつ自らに流れた時間を噛みしめる。

ジャカランダ　　習志野　石井　雅子

植ゑられて五年の並木のジャカランダ初めて紫の花房揺らす
一つだけ咲き残りたる紫陽花のうす紅の下雀きてゐる
ワクチンの接種のあとに覚えたるかろき眩暈は恍惚に似て
亡き夫の誕生日くればシャンシャンも上野で一つ歳を取るなり
歌ながしロバのパン屋がやつてくる木下（きおろし）街道に埃をたてて
高架下の花屋の台に今年またメダカと餌を並べてをりぬ
バク転して子らの拍手を受けてゐる内村航平によく似たコーチ

・感情の陰影がさらりと巧に表現された。七首目にはペーソスが滲む。

山の家　　川崎　伊藤　美恵子

春日大社の万灯籠を母の死後ともに見たる妹も亡し
うっすらと細くかかれる昼月を羽織れるように夏の鳶飛ぶ
ベランダに一本生えたる荒草をご縁と育てるつかの間の夏
町内にグループホームが建つというみんなで入れば楽しくもあるか
空身にてひとり来たれる山の家着のみ着のままの快楽があるる
ひもすがら鳴く郭公の夕べには息もかすれてかっこと鳴けり
ともに働きともに古びて今を在る　先にへばるなよキッチンのレンジ

・悲哀を詠む時は抑制を効かせて、機知の歌は切れ味よく詠んでいる。

風は六月

西宮　鈴木　桂子

しんしんとしんしんと雨白く降る　われの脳裏に咲くひめじょをん
世に生きてこころ小さく嘆くとき野をわたり来る風は六月
信号を渡れば見ゆる子の部屋に夕べをともす淡きあかりが
こだはりのうすきわれなればそんなことでおどろきませんとわれを寝付かす
もえながらポタリポタリと土に落つ母の愛した凌霄花（のうぜんかづら）
とぎれては泣いてゐるらし先生の秘密見しごと電話を終はる
「生きよ」とて送るメールが子には「死ね」と聞こえるといふ　さうかもしれぬ

・親としての濃き情愛とインテリジェンスが葛藤を繰り返す。

砂時計

札幌　鈴木　順子

北国の気圏を透過し降り注ぐ眩しい光にタンポポは黄（きい）
砂時計ひと粒落ちて刻むのは終りか始めか誰も知らない
心込め小さな窓とう切手貼り私の今をお届けします
とびきりのでこぼこを持ついびつさは私だけの魅力になれ
傘差して己を隠し淡々と自分が決めたこの道を行く
花暦をコブシ、サクラと捲りきて春惜しみいるリラ冷えの中

・自意識を持て余しつつそこを逃さず歌の契機としている。

シークレット

横浜　長野　道子

開港の記念の夜に一分のシークレット花火が港にあがりぬ
眠剤を半分に割りのむ夫の喉のあたりの白髭光る
病院へ夫と連れだち歩みゆくさくら通りをけやき通りを
心病みカシワバアジサイになる夫よ六月の雨の絵にならんかな
空色のワイシャツを着て出勤す夏至のまだらな陽の中を夫は
診察で網渡りですと夫が言うサーカスの日日を過ごしていこう

・言葉の力によって現実を覆すことができると信じさせてくれる歌。

その名

東京　西野　美智代

怒つたやうにカレーライスを食べてゐる立花隆を見たことがある
砂子屋の短歌文庫に連なりしその名やはらか丸山三枝子
テレワークに籠もりゐたるが二階よりのつそりと来てただいまと言ふ
競走馬のか細い四肢を思はせて東京オリンピックやるらし
疱瘡やコレラコロナの最中も戦火は絶えずにんげんだから
コロナ禍を恐れ過ぎずに侮らずシニアコーラス健在である
シンシンが二頭を無事に生み落とすコロナ騒ぎに騒がれないで

・切り口鋭く社会を活写する一方、個々の人間を見る目は実に温かい。

バージンロード

川越　満木　好美

娘と夫は腕を組みわれはあとに添う三人で歩くバージンロード
祭壇に誓いの言葉述べている娘の声の少し遅れて
式終えて新緑の庭に結婚の挨拶をする娘は晴ればれと
式のみで披露宴なしコロナ禍の結婚式はシンプルにして
私の作りしウエディングブーケ持ちさばさばと娘は嫁いでゆけり
子との距離計れずにおりベルフラワーは鉢より溢れんばかりに咲いて

・クールビューティーの花嫁を見守る母の複雑な心境を描く。現代の歌。

作品二、三特選

（九月号作品から）

丸山　三枝子　選

〈作品二〉

百合・紫陽花　　柏江口　絹代

雨の日にたずね来る友千疋屋のフルーツ持ちて肩を濡らして
雨降りの静かな優しい日曜日老眼鏡の度数がすすむ
持ち帰り瓶にさしたる黄の百合のおしべめしべに蟻のつきくる
ダンスパーティという名つけられ紫陽花の赤紫の花が揺れいる
A4の紙重なりてコピー機より出で来る日なり梅雨入り三日目

・一首目結句の納得の着地、二首目下句の転換の妙を味わいたい。

夢に来たりて　　東京　大島　昌子

雨はいやと思いていしが雨あがりの額紫陽花の青のつやめく
さわやかな朝餉に新茶入れて飲む送りくれたる友思いつつ
どくだみの香をうとみしは若き頃今は十字の白き花愛づ
夜の電話に消息ききし友きみが夢に来たりて朝までおりぬ
紫陽花の葉に潜みいしカタツムリ梅雨の晴れ間にそっと顔出す

・四首目の結句に籠もるリアリティー。夢の続きを又見ていると読んだ。

天拝山に思う　　別府　中島　紘子

大宰府の天拝山に登りたしここに嘆きし人に逢いたし
道真を左遷したるは妬みなり妬みは今も出る釘を打つ
自転車で海への坂道くだるときわたしは少女「時をとぶ少女」
ピラカンサのふんわり白き花の上に昼寝の金蛇なに夢むらん
大声でかならず名乗りをあげてくる鴉は律義な枇杷盗人なり
とかげ這い蝶舞い熊蟬とぶ庭に巣をかけ蜘蛛は微動だにせず

・蛇は苦手なのだが、四首目の「昼寝の金蛇」はユニークで惹かれた。

ジャックを探す　　常陸太田　藤本　佐知子

迢空賞の受賞喜ぶ俵万智ちゃんの変らぬ髪に白きもの見ゆ
おおかたはあれこれそれで通じ合う二人にこの庭広すぎて夏
樹に絡みぐんぐん登る蔓草はジャックを探しているのだきっと
急かさるる用事などなきこの朝香蘭読んで歌人とならん
為政者を貶してひとり呑む夫は悪酔いせぬか明日は田植えぞ

・政治批判の深酒の夫の身より、明日の田植が心配と嘆く堅実な作者。

健康診断　　さいたま　松沢　みどり

職場前に大きな健診車が停まる年に一度の健康診断
幼子が乗ったらはしゃぐことだろう検査台にて逆さまになる
検査員の言われるままにうつ伏せになり仰向けになり右を向く
いつもなら冗談ばかり言っている主任を見れば目が死んでいる
健診を終えて医師らは帰りたりバリウムのついた唇拭う

・連作で読ませる一連四首目の「主任」の、意外な表情が面白い。

〈作品三〉

おめでとう　　さいたま　丑山眞弓

さりげなく花束添えておめでとういくつになったと尋ねる息子
三十路なる息子の言い分よくわかり強く言えない親の歯痒さ
再会を楽しみに行く散歩道ボーダーコリーのあやちゃん探す
降り続く雨は激しく窓たたく地球の嘆きを知らせるごとく
二極化は人の仕掛けた白と黒どんでん返しのオセロはゲーム

・五首目の「白と黒」のどんでん返しは人情の機微を思わせて広がる。

五分は長い　　川口　川久保　百子

水遣りと女子プロゴルフと大リーグ夫の一日これにて終わる
ワクチンの話題にあきて街角の紫陽花さまざまラインにおくる
厄災を追い払うごと轟きぬサプライズ花火が東の間あがる
濃みどりの葉をたくわえて大けやき秘密のしかけを巡らしている
些末なる事に追われてカップ麺ただ待つだけの五分は長い

・脱力感の漂う日常のなかの五首目の「五分」に籠もる説得力。

雲のヨット　　相模原　栗原美津子

父の日に盛り上げて挿すカンパニューラーやがてからから笑い出したり
青空を映せる池にそよ風は雲のヨットを運びてゆくよ
戸を繰れば十薬の花白く咲き日の出の山に霞たなびく
幼児期のこんぺいとうはごほうびだったカルミアの花眺めて思う

・一首目の「花」と、二首目の「そよ風」の擬人化に工夫が見える。

玉虫色　　東京　中村陽子

花の絵を今日は褒められ鳩の首玉虫色に光っていたり
きっと今日はいいことがある軒先の椿の若葉に雨粒ひかる
何回も灰汁を取りつつ茹でこぼし甘い香のなか梅ジャム作る
原色を三色混ぜればグレーになるオリンピックは開かれるらし
緑道の小さな橋をカルガモが私を避けて渡ってゆけり

・身辺の事象を自らにひきつけ或いは取り込み、陰翳ふかく詠む。

明るい未来　　松江　馬場美信

抽斗の奥に見つけた血統書きみの生まれた十度目の夏
掌に余る小犬はこの家で幸せなのか問うてもみたし
振り返りつつゆっくりと歩みゆく犬に目守られいるわたしかも
七十を過ぎてこの頃しみじみと思う君との同行二人
新しく清しい今朝は昨日の明日で明日は明るい未来

・愛犬と作者に過ぎた十年の歳月を平明に詠み、歌に厚みが出た。

首夏の渚　　鎌倉　渡邉典子

ゆふかげの著き大路を逆光に対ひて歩む夏のはじまり
海風は裸足の指に受けむかな久久に立つ首夏の渚に
『進撃の巨人』を熱く語る子と湘南しらすのピッツァを分かつ
ただならぬ世のわすれもの咲き急ぎ散り急ぎたる薔薇の残花は

・三首目の上句～下句への、わずかな気分の転調を味わいたい。

村野次郎への旅（139）

「香蘭」創刊号を読む（六）

千々和　久幸

創刊号を読み通すのに思わず時間を要してしまったが、今しばらくご辛抱頂きたい。

この号には香蘭創刊記念第一回短歌會の記録が残っている。その記録は弾むような調子で、こう書き出されている。

香蘭史上最も記念すべき第一回短歌會が赤坂山王台小泉亭で催された。香蘭創立を廣く一般に宣言してより、日未だ淺き一月廿一日。山の手の町々には正月の名残りの羽根の音がわびしく聽えてゐた。（中略）小泉亭の明障子に鳥影をうつす程の明るい夕栄えまで、尚それで足らずに、丘向ふの兵隊屋敷に電気がともる迄……歡談は歡談を生み、論駁は論駁と交錯した（椰子夫記）

と美文調の名調子である。当日の來會者は十七名。主な詠草を引く

・雨げもつ雲垂れ居りて遠き夜空ちまたの方はうす明りせり　中河　與一

・淋しさに獨りしねむる板戸には竹のさやらふ音かそかなり　村野　次郎

・秩父嶺にまだきたなびく旗津雲あかつきかけて色かはりゆく　今井　嘉雄

・沖はいまだ雨ふるらしに裾曲なる岬は晴れて虹かゝりたり　奥野椰子夫

・ぢつとして居れば軒端の夕明り雀まぢかの巣にこもるらし　石野正太郎

・眞日かぶす廣野おほらてけぶらひて枯葉の竝木とほくつゞける　深野庫之介

・すがれたる茅原をわけて川水の流れはるけしあまつ日のもと　中河　幹子

・傷癒ゆる痒さに堪へて晝深き木の間に遊ぶ風を見てをり　村野　四郎

・夕照りのうつろひ寒き冬田の上なびかふ霧や川筋ならむ　佐野　翠坡

社内の歌会で村野先生の出詠歌を見たのは初めてである。わたしが「香蘭」に入会してからは本社歌会、全国大会では先生の出詠はなかった。だから主宰者は出詠しないものと思い込んでいた。

その先生の歌、「獨りしねむる」はこの後、「香蘭」で流行ったであろう軽妙な詠い口である。それにしても一、二句、当時はこんな大雑把な表現に何の抵抗もなかったのだろうか。作者の境遇について予備知識がなければ、概念的と言われかねない歌である。

しかしそこが結社人の交流の濃密さであり、その事情は周知であったのだろう。下句は順当な表現になっている。

ここでは村野四郎氏の短歌が珍しい。一、二句にわずかに心理詠的な屈折が窺えるが、下句は穏当に短歌らしく歌い納められている。三句までを俳句として読めば、その方がずっと気が利いている。短歌の下句の抒情が功罪相半ばすることは今も変わらない。

中河幹子の歌はオーソドックスで、いかにも短歌特有の光景を素直に歌い上げて、堂々たる風格を漂わせている。

村野四郎氏の名前が出たついでに、例によって少し脇道をしてみたい。それというのもわたしは明宝研究会の20年9月と21年7月の二度に亘って、村野次郎、四郎の作品を元に短歌と詩を論ずる機会があり、未だにその余塵が燻っているせいもある。

以下は四郎氏の次郎短歌鑑賞を『秀歌鑑賞十二ヶ月』（昭和42年、愛育出版）から拾ってみる。最初に「あとがき」を読んでおこう。

短歌も俳句も、広い意味では詩である。だから詩についてのポエジイ論は、そこでも成り立たねばならない。

元来詩というものは、詩でなければあらわせない唯一の世界の表現だが、同様に短歌もあの特殊な形でなければ、あらわしようのない唯一の世界を表現するもので、ともにほかのどんな言葉でも言いかえの出来ない世界である。

それゆえ、歌もこれを解説することは不合理なのであって、解説されたものは、もはや別のものになってしまう。

だから私は、ここで短歌作品を解説しようとするつもりは毛頭なく、ただ作品をめぐって、私自身の想像力を勝手にあそばせるにすぎない。

（後略）

・居る筈もなき夜のしじま空耳に蟬ありやまず命鳴きつぐ　　村野　次郎

秋の夜ふけ、静かにしていると耳の底で、しいいと蟬が鳴き続けている。だが、いまどきそんな蟬などいるはずがない。空耳であることはわかっている。とすると、あのやすまず鳴きしきっているのは、命さびしむわが老いの声かもしれぬ。

・よみがへる筈なき記憶うつくしくよみがへらして夜の菊匂ふ　　村野　次郎

ふと、わけもなく愛しいことを思い出した。こんな記憶は、もうとうに人生の底に埋れはてて、普通では、よみがえってくるはずもないのに―。

やはり、あの菊の花のせいか。闇のなかに、ほのかに白く、夜の秋を匂わせていた菊の花の仕業にちがいない。

・水甕に漬けておきたる根山葵（ねわさび）の青きも今朝は凍りけるかも　　村野　次郎

ことし最高の寒さ、などと朝刊が報じている。そういえば室内の水が凍ったのは、今朝がはじめてである。

だが根山葵はさすがに寒さにつよい。水甕に張った氷のなかから、けなげにも小さな若葉を起している。その身にしみるような青さ。きびしい寒さの中で、遠い春をおもわせる、ただ一つの愛しさである。

・生業（なりわい）の余白に湧きて故わかぬこの淋しさはいづこより来る　　村野　次郎

息つぐひまもない生業のあわただしさ。そうした仕事上の一喜一憂は日常のことだけれど、この頃、仕事とは全く無関係の時に、ふいと心をおそってくるあの理由のない哀愁は、いったい、どこから来るものであろう。この非現実的な寂しさ。

それは、やはり人間であることの寂しさにちがいない。

字義に拘らぬ読み手の奔放な想像力が、作品の幅を広げる鮮やかな作品鑑賞である。実はわたしは四郎氏を迎えての本社新年短歌会に一度だけ出席したことがある。その折には選ばれた作品番号を提示されただけであった。

「詩人はこういう歌を採るのです」というのが、批評と言えば批評であった。